

第5回森林再生実行会議 議事録（全文）

令和4年2月20日（日）13：30～15：30

松本市役所 本庁 第一応接室

（森林環境課長）

定刻となりましたので、只今から、第5回 松本市森林再生実行会議を開会いたします

本日の会議は、Y o u T u b e 松本市公式チャンネルで配信しています。

会議の終了は、午後3時30分を予定しています。

では、香山座長に進行をお願いします。

（香山）

それでは、第5回の会議を始めたいと思います。

第5回の最終回は、多くの市民の皆さんと交流できるイベント型の開催を計画していましたが、新型コロナウイルスに関わる「まん延防止等重点措置」に伴い、市民の皆さんは、Y o u T u b e 配信で見ていただく形に変わりました。

ただし、ゲストで、市川さん、菊地さんにZ o o mで参加をお願いし、協議に加わっていただき、進めていきたいと思います。

時間が2時間と少ない中で、ボリュームが盛りだくさんですので、前置きはこの位にして、本題に進んでいきたいと思います。

今日の課題は最終回で、森林再生実行会議を1年間行ってきた総まとめとして、市長への提案書をどんな形に作っていくのかを議論していきます。

ただし、2時間の会議の中では、提案書を作るところまではいきませんので、どこがポイントなのかを改めて、委員4人と市民目線で市川さん、菊地さんにコメントをいただきながら、最終的に1か月しかない中で作っていく提案書の土台を作ろうと思います。

文書自体は、会議の中では作りませんので、委員4人と事務局で最後に詰めていきたいと思います。

今日の進め方としては、手元にあるドラフトを見ながら、進めていきたいと思います。

ドラフト自体は、F a c e b o o kに午前11時にアップロードしていますが、少し書き加えた最新のものが、委員の手元に配られたドラフトになります。

配信をご覧の皆さまのドラフトには記載のない議論もありますので、ご了承

ください。

まず提案書の構造ですが、昨年度の森林再生検討会議で提出された提言書の章立てに従って作ろうと考えています。

ただし、その前の段階として、ドラフトの第2章の森林再生に向けた課題を読んでおいたほうが良いと思います。

これは、昨年度に提出された提言書の内容にも少し記載されていましたが、結局どこに問題があるのかを改めて出したほうが良いと思い、ドラフトの2に記載しました。

今日の議論の中で、そこを最初にもう1回おさらいする感じです。

ドラフトの第3、4、5章は、わりと専門的な話になるため、それほど議論するようなことではないので、さらっといきます。

もう一つは、前回の会議でも議論をしていますが、昨年度に提出された提言書の中で大きなウエイトを占めている、第6章の人材と組織になります。

森林再生市民会議を作ると提言され、どんな形にするのかをこの今回の実行会議の中で協議していかないと、来年度動けないと思います。

その部分についての議論を、後半の時間でしていきたい。

そのために、市民会議の動かし方というタイトルのドラフトがありますので、それを見ながら進めていきたいと思います。

それでは、課題の部分を改めてドラフトを見ながら整理していきたく思います。

専門家がない。

実行会議の委員4人のうち3人は比較的に専門家側だと思いますが、そうは言っても専門家がない。

特に松本市に専門家がないと言ったらいいかもかもしれませんが、その辺のところをどういうふうに考えているのか小山さん。

(小山)

実際の現状認識の中で大きく分けて3つの課題があります。

一つ目は、専門家がないという大きな課題の中に、市町村職員の問題、それから、私たち委員の問題があると思います。

専門家がない課題をどのように解決していくのかといいますと、松本市は比較的、全国的に見れば優れた方だと思います。

しかし、市町村の職員採用形態で考えていきますと、長野県、国であれば、林業職種での職員採用がある場合が多いのですが、実際にそういう採用形態を常に維持するのは、市町村レベルではかなり難しいのが現状ではないかと思えます。

また、そういった形で仮に採用されたとしても、市町村の行政は幅が広いので、ずっとそこに居ることは難しく、色々な部署に行く機会が出てきます。

そこで、どうやって育てて、職員の技術力を磨いていくかについては、私が所属しています県の立場（指導）としても、ちゃんと出来てないということがブーメランのように私自身に返ってくるわけですが、そういったところでの技術力を維持しながら、市町村の林業行政を預かる職員として付き合う必要があるのではないかと思います。

一方、県の職員という立場になりますと、県には林業普及指導員という職員がいますが、まだ少ないという現状があります。

県と市町村の連携がなかなか難しいという場合が現実にはあるのではないかと考えています。

私どもが勤めております県林業総合センターにおいても、県それから市町村との連携をとりませんが、私自身の職場には、現状3名の職員で県全体を見ていますが、かなり厳しい。

また松本市としても、これだけ大きくなった市全体を見ていくのは非常に厳しい部分があると思います。

そうすると、行政に頼った専門家もある一定量は必要ですが、そればかりでは、大変ではないかと現状を整理してみたらいいかなってというのが、前半部分の専門家の課題ということで、メモ書きで現在作っているところです。

（香山）

ちょっと違った立場の専門家ですが、三木さんはどう思いますか。

（三木）

全国的な研究では、市町村の森林関係の部署は市町村森林整備計画等の法律で決められた業務をやるのに、手一杯な状況であるということが明らかになっています。

そう考えると、市町村役場の中だけでは市全体の森林をこれからどうしていくか、それから市民がこんなことやってみたいと言うことに、すぐに対応するのはなかなか難しいだろうと思います。

そうするともちろん、県等の力を借りるのも必要ですけれども、市民自身がある程度自分たちで、こうしたいんだっていうまとまった形で示せる場所が必要になってくるだろうと思います。

それは、問題意識として同じかなと思います。

一方で、このドラフトの中にも書いてありますけど私たち大学の研究者は、自分の専門については、非常に詳しいかは分かりませんが、関心を持ってやっ

ています。一方で、市民の方々が考える森林についての認識は、非常に様々です。

例えば、松本市の森林をこれからこういうふうな形にしていきたいと思います。このことを、研究側の専門家が考えると、その人が得意なところだけになってしまいます。実際に、市民の中にこういったニーズがあるのかが明らかになれば、それぞれの専門とする人が、それに助言をしたり、一緒に考え、一緒に実行していくことが初めてできると思います。

(香山)

そういう中で、現場と学問的な専門家、あるいは行政的な専門家の間を繋ぐ役割がフォレスターではないか。

そういうことで、森林総合監理士（フォレスター）っていう制度が今の日本の中にあるわけですけど、提言書ではそういうものが必要だろうと書いていますが、現実にはまだ機能してない。

森林総合監理士の資格を持っている方は大勢いらっしゃるって、それぞれの活動をされていますが、まだこういうところまで繋がっていない。

林業・森林について、非常に高度な専門的なことが必要なのに、専門家はいるが、それが実際に現場へ繋がっていくようなシステムがない。

それが松本市だけの問題ではなく、恐らく日本中にもあると思いますが、なおさら松本市においては、難しい状況です。

それをどうしようかというのがこの会議の課題ではなく、次にどうしようかというのが現状認識だと思います。

渡辺さん、そういうわけで専門家が当てにならないのですが、どうしますか。

(渡辺)

私は3年前に松本に移住した時に、木が好きで、まず誰に相談したらいいのかが分からないということや、窓口がどこにあるのかが分からないこと、里山に勝手に入ってはいけないという意識があるので、そういった時に、どこに行ったらいいのかがまず分からないということです。

また、前回の会議で、市民の方からの意見の中に、相続で先代から山を引き継いだけど、その後どうしたらいいのかが分からない。管理や場所も分からないことが悩みとしてあって、そういった悩みを相談できる窓口を市民の方に届けられたらいいなと思います。

(香山)

それが次の課題の2の中で、市民の関心が薄いというところにも繋がってくると思いますが、ここで、ゲストの方と繋がっている状態ですが、お話できるでしょうか。

それでは、これからゲストの方に入っていただいて、市民の関心が薄いことについて、我々の簡単な調査の中でもこんなことをやっているということについても市民からの反応は、なかなか難しいという印象があったのですが、市川さん、松本市の他の委員会にも入っていただいています。この森林再生について、市民目線で見た時に、どんな印象を持っているのか、ちょっとお話していただけますか。

(市川)

現在、アルプス公園の自然活用検討会議の委員をしています。

仕事はデザインや企画の仕事をしていますが、市民として松本の山や森林の活用に関心があるので、今日はこの検討に参加させていただければと思います。

市民として関心が薄いということに関してですが、そもそも市民の関心が薄いのが、いろんなイベントや生活をしていて、思うところが幾つかあるかなと思っています。

関心はあるが、それをどう表に出していいか分からないっていうことも一つ課題かなと考えています。

例えば、山に入って何かしたい、自然観察したい、キャンプしたいという、一歩先の課題に関して触れる機会っていうのは、そもそも見つけづらかったり参加しづらい。

ファミリーや子供向けだったりすると、それ以外の方は、なかなか参加しづらいのかなっていうのを、実際感じたこともあります。

市民の方の関心を、よりイベントや実際に参加するものが幅広くあると、実際に関心がある人が目に見えてくるので、そうすると関心が薄いかどうか、より分かりやすいのかなっていうのを、お話をお伺いして思いました。

(香山)

関心が薄いかどうかは、実はよく分かってない。

森林再生実行会議の最初は市役所で始まり、休日に開催していますので、そもそも入って良いのか分かんないような場所で会議をしていました。

前は、あがたの森公園で開催したわけですけど、YouTubeやホームページ、あるいはSNSで伝えても、なかなか伝わりきっていない。

関心が薄いのかも実はよく分かっていないのかもしれないです。

その辺をもう1回渡辺さんに振ってしまうのですが、渡辺さんは関心が薄いのではなく、関心がかなり高いポジションにあって、こういった委員にもなったのではないかと思います、実際に同年代で話す中で、関心はどの辺にあると思いますか。

(渡辺)

関心について、うまく伝える自信がないのですが、山や登山が好きで関心の強い人がいるのもそうですし、キャンプという切り口で、山の事にはあんまり詳しくないけど、ソロキャンプや家族でキャンプをするのは好きだという方も関心がある。その関心っていう一括りでいうとちょっと難しいと思うのですが、何かしら木に関われそうな、いろんな派生があります。

その意味であれば、松本市は移住の方も多いので、その中には関心を持ってきてくださる方もいらっしゃると思います。

また、クラフトフェアっていう大きなイベントがあるときには、松本市以外の方も興味を持って松本に足を運ぶ方もいらっしゃいます。

一方で、元々、松本に住んでいる方が、山が近くにあるのが当たり前すぎて、関心という部分が「当たり前にあるもの」になっている方もいらっしゃるのではないかと思います。

後は、街の中で内装に木を取り入れている方や、料理店で経木を使われている方、関心を持っている方もいらっしゃると思います。

(香山)

実は今、私たちがこういったことを行っている一つのきっかけは、松枯れでした。その松枯れが、多くの市民を引き寄せたことは事実です。

それに対して、大変な議論があって、昨年度の提言もあって、技術的にはここだということが示されていますが、もう松枯れは終わったのかなということになると、また関心が他の方についてしまいます。

森林っていうのはずっとあるのですが、マツが枯れた後にどんな森林ができるかっていうことを、昨年の提言の中でも具体例として示されてはいたのですが、なかなか、どう繋げばいいのかなっていうところが浮かんでこない感じもありまして、後々繰り返し出てくる話になるかもしれないのですが、この関心の部分の文書をだいたい作文していただいたのは小山さんだと思うのですが、すいません、ネットにはまだこの部分出てないですが。

(小山)

実際に、渡辺さんや市川さんが言われるように、いろんなチャンスに欠ける

のではないのかなってというのは、私自身もそうだと思います。

私たちの生活とどのくらい森が近いのかなと考えていくと、案外近くはないのではないのかなってというのが、街の中に一日立たせていただいた経験です。

それはいろんな報告書を今回読ませていただきました。

委員会報告書などからもかなり文書をいただく中で、いろんな世代の方にとってみて、チャンスが少ないよねっていう部分も当然あるのですがそのチャンスを作り出すほど皆さんが森というキーワードが出にくくなっているっていうのが問題なのではないか。

ということは、やろうとする人はチャンスを作り出すんだけど、それで来る人もいないとやはり市としては、大事な意識を持ってくる。

目の前に松枯れが起きて、木が枯れてしまった。

あれ、困ったぞっていうのは今回の一番のキーワードだと思うんです。

じゃあ、松枯れの後何かの森になってしまったらそれこそまた忘れてしまう。ということは、私たちと、近くの山とが、ちょっと距離が離れているんじゃないかな。

そこが一番問題で、距離が離れているからまた新しいチャンスを作って皆さんを近づけましょうっていうと、その1回はできるかもしれないけれども、じゃあそれがずっと続いていくようにしていくにはどうしたらいいのか。

そういった活動を、これからずっと続けていかないと松本市の森林が再生して動いていかないような気がした。

そこを大きな課題かなと思って、少し加筆をさせていただいています。

そういう意味では、僕は逆に市川さんがそういうご提案を持ってこられて、地元でそういったこととは無関係で街づくり全体のこととかなり関心を持っておられた菊地さん、突然呼びつけられて申し訳ない部分があると思うんですけども、その菊地さんにとっての森ってどんなイメージなのかなって聞いてみたい気はするんですけども。

(香山)

順番が回ってくると、待っておられたと思います。

それでは菊地さん。お願いします。

(菊地)

参加が遅くなり、申し訳ございません。

今日はお呼びいただきまして、どうもありがとうございます。

これ今、あれですよ。松本市のYouTubeチャンネルでライブ配信されている状況という理解でよろしいですか。

一言だけ自己紹介をします。

松本市の駅前大通りで栞日という書店兼喫茶や、向かいにある菊の湯っていう銭湯の運営をしております、代表取締役の菊地と申します。今日はよろしくお願ひします。

まず、皆さんの議論と手前にあった委員会の提言というところに対して、一言一句を目で追えているわけではないので、やや的外れな発言もあるかと思いますがその点、あらかじめご了承くださいと思います。

今、小山さんが関心を寄せてくださった僕の視点で見たときの森であったりとかはどういうふうな存在なのかっていうところに対して、まず端的にお答えします。

僕自身は、静岡の生まれ育ちで松本という街にやってくる直前は茨城県のつくば市というところにいました。

いわゆる大都会で生活をしたことがない人間で、静岡にいた時は比較的、山や川が近い環境で生まれ育っています。

つくばで大学を過ごした時にも、筑波山っていう山があつて、学園都市とはいえど、もともと桜村という村だったところなので、周りには田畑も広がっていて、自然が豊かな環境の中で学生生活を過ごしていました。

2010年の冬に松本にやってくる、このアルプスに抱かれた街に来た時に、その山の存在感は、もうすごく大きなインパクトでした。

静岡で生まれ育った時に見ていた、富士山の端正な佇まいとはまた別の圧倒感みたいなものがあつて、壮巖というような言葉がふさわしいような、ちょっと山の大きさとか、尖り具合とかに圧倒されるような思いを抱いたことが最初ですね。

僕にとって山は日々眺めるものであつて、特に山登りは松本に来てからずっとしたいな思つて、こういう装備からまず入つてはみるんですけど、なかなか店というものを構えてしまうと、行く機会というところを作るのが難しく、結局まだ山には登れず、もう10年も経つてしまうみたいな格好になっています。

でも日々眺めていて、未だにやっぱりこう、特に冬の空気が澄んだときなんか、僕は今、中山に住んでいまして、松本市内の南の高台ですね。

家から白馬の方が見えて、朝、山を見ながら下つて出勤すると本当に気持ちがスーッと整っていく。

毎朝見ても、毎朝ちゃんと感動できる。「いやすげーなこの山」みたいな。

そういう感覚で、見守ってくれている存在っていうところが大きくあるかなと思います。

ごめんなさい、僕のパーソナルな何ていうかな、育ちもあつての僕にとって

のアルプス、特にアルプスの感覚というのは今、申しあげたようなところで

す。
一方で、多分皆さんが議論の的としている里山であったりとかっていうところ

に関しての関心という意味でいうと、これはもう比較的、最近僕の中でも高ま

まっているようなところがあります。
大きな中山という山の中、どちらかという山間部の中で、子どもを2人育

てながら、街に通いながら仕事をしているってところになってきたときに、今

の自宅に住むようになったのは、2016年なので、まだ10年は経ってないん

です。
自転車で通っているんですけど、中山小学校のあたり。
そこまで高い中山ではないんですが、やっぱ自転車で通える距離に、これだ

け田んぼが主に広がって、木々に囲まれているところを毎日行き来できる職場

が街にあってってところが、僕の中ではすごくスイッチのオンオフにもな

る。自分の仕事に集中して家に帰ったら家庭があってっていうところもすごく

満たされていて、何かこのコンパクトな街をこう山がぐるっと囲んでいるって

のようにこの場では捉えるのかだとか、そのグラデーションの中で特に、どう
いう市民に関心を持っていただくことが必要なのかとか。

そういった問題がどうしても出てくると思うので、市民かそうじゃないかっ
ていう二者択一の話ではきっとないと思うので、そのあたりの解像度がもう少し
し上がっていくと良いのではないかなというふうに感じています。

(香山)

非常に分かってきました。

市民ということの部分にいろいろ新しいこともいただいたんですが、森林に
ついても、もう1回ちょっと定義を直してもいいのかなって感じがちょっと
しました。

森林っていうのは、どこにあるんだろうか。

森林法では、森林というのは決まっているんですが、松本にとってあるいは
松本市民にとっての森林って、森林法の森林とイコールではない気がして、里
山って考えたときにその辺についてどうでしょう。

小山さん、そのあと三木さん。

(小山)

非常に今の菊地さんの住民という市民っていう話はわかりやすい話だと。

逆に私どものメンバーの方でも森林といった時の、実は森林っていう定義は
かなりグラデーションが濃い。

法律で森林って調べますと、美ヶ原から山の上、北アルプスの山の上からず
一つと降りてきて、実は菊地さんがお帰りになっている周りの山でぎりぎりあ
たりまで森林かというふうに多分思われると思うんですけども、実はその一部
が山、森林じゃなかったりする。

昔畑だったところに、勝手に木が生えてきたところは、市の計画上の森林と
しては認められてない。それが先ほど言われた、人のところをターゲットにず
っと街に住んでいる人は市民でも、これに関わることの強い市民なのかどうか
かっていうと、ある意味似通ってくる。

そういうことも一つ言えばずっと通いになっているところにあるあがたの森
は森林かということであればまた森林じゃないよね。

だけど、私たちにとってみれば、実際に街の中でお話を聞いたとき松本の森
のイメージって何ですかって言われたら、あがたの森っていうふうにお答えに
なられた方が実際にいらっしゃる。

そうすると街の人とかいろんな皆さんにとってみると、あがたの森もやっぱ
り森のひとつだよ。

だけど、行政的にはあれは森じゃないって言われると、どうすんねんこれって話になって、多分お互いのグラデーションを持ちながら両方で広い範囲を持っているじゃないかと。

お互いの人たちが持つ、その市民のイメージもそうですし、今回の菊地さんのお話でそこがすごいクリアになってくる。

ただ、一方で僕らが考える森林のイメージは、林野庁の法律に乗った森林と、そうじゃないんだけどすごく森っていう状態に見えるところと、明らかに管理をしているのは森林の係じゃないんだけど、市民の皆さんからすれば大事な森だと思う。

10年くらい前ですが、FM長野の前のケヤキの木を切る、切らない、街の森をどうするかみたいな議論が出たことがあります。

でもあれは、今回関わらせていただいている森林環境課ではどうすることもできない森なの。でも市民にしてみれば森じゃんっていうことになる。

そこまでも多分含みながら考えていかないと、グラデーションを持ちながら、それぞれのトーンを持たないといけないのかなっていうのが、少しこのどんどん広がっちゃって、おかしくなるっていう、ちょっと気をつけなきゃいけないところです。それでもそういう意識を持ちながら、こういうときはこうしようをこういう人たちがターゲット、街の人たちにとってみると、もしかしたらあがたの森みたいなのもそうですし、菊地さんのように、中山から通われている方にとってみれば、周りに見える森は大事でしょっていう。

それぞれの人対森という関係性をちょっと綺麗にしていくと、もうちょっとこの計画っていうのが、面白くなるのかなって気がします。

(香山)

里山っていうことで、生活に密着した森林っていうのを表しているんですけど、この里山という言葉も、人によって随分感覚が違うんですが、集落部周りで見えるところが里山なんて多くの人が今考えるかもしれませんが、別な考え方で言うと、これ去年の専門家会議の中で出てきた議論ですが、1日で行って帰ってこられる範囲が里山じゃないか。

そうやって考えると、山辺地区の人たちにとっては美ヶ原あたりも里山になっちゃうんですね。昔はそれほど人と森林の関わりっていうのが深かった、そのぐらいに変化して、その変化の真っ只中に今もいると思いますけれども、そういう中で、市民と森林っていうのをもう1回整理して、そのあとの中でもいろんな議論をしていくっていう整理の仕方が必要だなと思いました。

それでは、三木さん。今の話を引き継いで。

(三木)

難しいんですけど、森林と市民との関わりという点でもグラデーションがあるだろうなと思います。

例えば、市民の中で林業の仕事をやっておられる方についてはまさしく職場であるというような繋がりですし、例えば、山は眺めるだけの視界の中に入っているものとして、遠景としての森林っていうふうな形で関わりを持っている人もいてですね、別にどっちが偉いとかっていうふうな問題は、ないんじゃないかと。このグラデーションを前提として、話を進めていけばいいんじゃないかなというふうには思います。

例えば、遠い景色、遠景として森林を認識しているだけの人にとっても、それが無くなっていいって話ではない。それがどうあるべきかっていうのはそういった人にとっても関心がある。それをうまく扱っていけると面白いんじゃないかなというふうに思う。

それから実は森林そのものもですね法律上グラデーションがあるというのと、森林の年齢そのものにも若い森林と成熟した森林というのが松本市にあって、例えば今松枯れが被害を受けて伐っていますけれども、この伐った後には新しい森林が出てくる。

新しい森林は大きな木ではないので、それこそ小学生とか中学生が容易に管理ができるような、森林ではやっぱり大きな松が入っているところは、写真なんか後ろに載っていますけど、やっぱりプロがやらなきゃいけない森林っていうのもある。一方で、新しい森林は大きな木ではないので、それこそ小学生とか中学生が関わりやすい。

そうすると、今松本市の中には松枯れの後に次の森林が生えてくる。そこで、その市民と一緒に育っていくことができる森林というのが出来つつある。これまでは割合大きな木ばかりの森林であまりグラデーションなかったですけど、これからそういう森林自体の年齢のグラデーションが出てくるっていうところもこれから面白いところかなと思います。

(香山)

松枯れという現象が起こって森林が変化しているっていう中で、森林の見方が、変わっていくのかな。

木が生えているところが全部森林なのかどうか分からないんですが、一方で、街路樹とか、公園とかっていうのはもう明らかに緑として、グリーンインフラなんて言葉も今使われますけれども、松本にとってのひとつの環境そのものですよ。

松本平の風景を作るっていうところをキャッチコピーにしている林業会社も

ある。

林業ってのも山奥で木を切って出してくるだけではなくなってくる、そういう時代だと思いますし、そういう中で議論の進め方、議論の立っている場所、どこに立って話をしていくのかなってということが、少しずつ動いていく、その動いていくことをちゃんと捕まえていくってことが必要なのかとそんな気がしています。

市川さんは眺める森林的な感じですか。生活している環境というのは。

(市川)

そうですね私も自宅が松本城の周辺なので、割と都心の中に住んで、意識的に行こうと思わないとやっぱり山には関わらないかなと思うので、見る山に近いですね。

(香山)

もちろん見る山も大事ですけど、どうやって実際に今公園的な森林もそうですけれども、普段からそうやって出かけていくっていうと、どういうきっかけで出かけていくっていうのがあるんでしょうか。

(市川)

やっぱり、仕事で林業をやったりとか農業をやったりしないと、自らこう行くきっかけがないとあれかなと思っています。

私自身は自然が好きなので、キャンプとか、父が釣りをやるので美鈴湖の方へ行ったりとか、やっぱりそういうアクティビティ系が多いですね。

ただその中で最初知らないことがいっぱいあったんですけど、どんどんこう知っていくと、すごく関わるハードルが下がってきたなっていうのは、体感として思っています。

(香山)

無理やり書いてあること（ドラフト）に結びつけているんですが、市民に求められる役割とはどうなんだろう、どこにあるんだろうかって言うね。

それを今回の報告の中で一つ出していきたいと思っています。

この話を、ちょっと時間配分を見ながらそろそろ始めていった方がいいかなと思っています。

なんのことかっていうと、市民会議というものなんです。

市民会議というのを作りましょうと去年の提言の中で言いました。

じゃあ市民会議って何なのか、市民の森林、松本市森林再生市民会議（仮）

なんですけれども、今話してきた森林とか、市民とかっていうキーワードがど真ん中に入ってきていまして、その松本市森林再生市民会議というのが何をやるのかというとビジョンを作る、長期のビジョンを作る。そのビジョンを政策が反映しなきゃいけない。そういうふうに書いてありますね。

そのビジョンを作っていく市民会議はどういうものなのか。実はこの市民会議の動かし方っていうこの文書自体は、今回の報告書の中にどう盛り込まれるのか分からない。ちょっと外にはみ出しているメモ書きですけども、そもそも会議、会議、そういう感じになっちゃうと思うんですけどもこれから先、いわゆる市民会議と言われるものを考えるときに、ちょっと面白い提案をここでしています。

とにかく、山のことなんてね。

ここでやっていることと、現場でやっていることが全然ずれちゃうってことは、意味がないんじゃないかという話なんですけど、ここの部分のたたき台のことを書いていただいたのは小山さんでしたっけ。

(小山)

実際こういうことをやっていこうよ。ビジョンを立てていこうよ。ともすれば山でお仕事をしている人たちがこうしたら自分たちが楽しくなるよねって、作り上げる。

いろんなビジョンを作ります。長期の計画を立てます。

どっちかっていうのはいろんな方の声を聞くけれども、将来の方向性をこうしたいよねって大きなもう何かイメージはあって、それをある種承認するとか、それに近づけていく方向に考えていく、世の中意外と多いような気がしていて、でも森の話って、例えば明日の話を考えるって、今この辺で枯れているマツも出てきたのは50年から60年前の話なんです。

もしかしたらマツの寿命から考えれば、200年、300年生きている。

要するにドラえもんが普通に歩いている時代まで、この次の木が育っていくわけなんですよ。そうして考えていくときに、それを頭が白いとか頭の髪の毛がないような人間が考えている時代じゃないんじゃないか。

もっといろんな人たちがいろんな声を聞いて、自分たちの身近になって考えていこうよっていうのが多分ビジョン。具体的にそれをどうして、それがお仕事としてどうなる、お金がどうかかるっていう話の前の段階をきちんとやっていくのか。もうちょっと広い目線でやり、いろんなそのグラデーションがある中でやっていくのが、わかりやすいんじゃない。じゃ、そういうビジョンってどうやって作っていくんだろうというときに、どうやって皆さんと一緒にお話ができたり、その時に多分大事になってくるのが、さっきの話も出てきた、ち

よっと通り道に森が見えるという菊地さんのようなタイプ。背景なんだよ。

一方で菊地さんがこっちに来た時のようにあのアルプスの凄さはやめられないよね。登りたいけど俺は仕事が忙しくて登れないよっていうさっき言っていたキーワード。アルプス公園に私は関わっているけれども、普段なかなか誰かがうんと背中押してくれなきゃ動けない。こういうことって例えば会議をやりますって言っても、「はい私やらしてください」とはならないはず。

でも、何か起きたらそういう皆さんの声を森の中に反映させていくのは、だって毎日見ている、毎日通って気になっているもん、それが変わっちゃうとちょっと困るんじゃないっていう人たちが実は多いんじゃないかと。

そういう人たちとビジョンを作っていきたいよねっていうのが最初に、このメンバーの中で少し話をしていた。そういう人たちの声を、本気で動くって時は、会議みたいなので、雁首そろえて、口の字になって話をするのがいいのかなっていうのは多分香山さんから出た意見、そもそも会議なのかという議論、そういうのをどうやって組んでいったらいいのかっていうところが実は一番悩みやすいところ。

こうやって4人が前に座っていて、今日はお2人とですけれども、対面ではなくてオンラインではありますけれども、一応顔を見合わせながらお話ししている形式がいいのか。そうじゃないよね、下手すればこういう話って飲みながらわっと出てくるみたいなことも当然あるわけで、どういうスタイルにして考えていくのか。それが皆さんの中から多分かなりの皆さんは、俺は林業をしていますよって人たち以外はちょっと遠い存在になる。そのちょっと遠いんだけど、今回みたいに松枯れで枯れてしまったら、いきなり皆さんあれどうしたの、困ったねって、言い出すようなものに対して、何かあったらふっと動けるんだけど常にそういう人の気持ちに寄り添うことができるスタイルってどうしたらいいのかな。

市民会議って言われたときに、このメンバーで考えたのはそんなイメージ。そういう空間ってどうやって作っていけばいいのかなっていうのが多分この動かし方の一番上にある。どんな会議なのっていうドラフトになってくればよい。

(香山)

良くも悪くも行政がやると、もうこの次の段階は、いわゆる、森林とか林業に関するステイクホルダーを並べて、ただその人たちにガンガン喧々譁々議論したって先進まないから、とりあえずはたたき台になるものを、誰か文章の上手い人に作ってもらって、それについてどうでしょうって、やるパターンになるんですね。

長野県で実は私そういう委員を過去に何度かやりまして、森林づくり条例とか、森林づくり指針とかですけど、もう完全に専門家向けのもので、(市民が) 読んだことないんですよ、長野県の森林づくり条例とかね。

それは専門家が自治体の行政をやるうえでの参考になる資料として作られていますけれども、これから松本でやっていくのはそういう話じゃない。それをどういうふうに作っていくか、そういう市民会議を作っていきたい。

いわゆる行政的な意味での専門的どころしなきゃいけないこと、それはそれで別途やればいいんですよ。まさにさっき言った専門家が足りないって部分。大きな課題ではあるのですが、足りないなりに専門家が頑張って勉強してやっていけばいいですけど。

ただビジョンというのはもっと大きな広い背景になるので、どういう考え方の土台があったらいいのか、そういうような話でそこをつくる会議というのは、ただ会議室に集まってやるものではないのではないかなと、そういう話ですね。それはあんまりよそでやった事がないのでどうやってできるかよくわからないのですが、でもおそらく髪の毛の色はあまり関係ないと思いますが、若い人の方が積極的にいろいろなアイデアが出てくるのではないかなという気はしています。

という訳で、委員サイドでいうと一番若い渡辺さん。どんなことだったら市民会議で私、委員になりますって言えますか？

(渡辺)

本当に最初面白そうだなって思ったらみんなやってみたいかもって思うんじゃないか。

市民会議っていうタイトルも私はあんまりよくないかなと思っていて、なにかすごく堅苦しいイメージだとやっぱり私たち世代とか、いわゆる若手と言いますか、若い世代の方が興味を持って覗いてくれるきっかけづくりというのがすごく大事ななと思っていて、やっぱり面白いことって中にいる人たちもすごく楽しそうにやっていると、そのまわりでなんか面白いことやっているから私もやってみたって自然と惹きつけられるような感じになると思うのですよね。

だから言葉で表すのは難しいですけど、きっかけとしては面白そうなところをつくっていくのを大切にしていきたいなと思いますね。

(香山)

面白いことをすごく発信しておられる菊地さんどうですか？市民会議ってやっぱりちょっと堅苦しいですよ？

(菊地)

名称自体はなんだっていいとは思いますが。市民会議という名称ではあるけれども、このドラフトの中にあるようにただ話し合いをするっていうための合議体ではなく、活動を伴う活動体だっていったことが、実際ここから始まっていく市民会議の取り組みや、発信によって伝わるべく人に伝わればよいという話だと思うので、名称自体が市民会議であること自体は、僕はそんなに違和感はない。

小山さんの話をちょっと巻き戻しながらなんですけど、聞いていて感じたこととしては森の方にもグラデーションがあるみたいな話に巻き戻るので、森とか自然って行政区画って人間の意図って全く関係ないじゃないですか、ここから先、塩尻市なので根を生やさないでくださいって言われても困るじゃないですか。市境に生えている木は困るし、そこを住まいにしている鳥とかだって、ここから先は区域が変わるのでパスポートが必要ですよみたいなことを言われても困るわけで、彼らにとっては関係ないですよ？行政区画とかね。もっとより自然の生態系のなかでむしろ人間の方がその生態系に寄り添って、話を進める必要がある案件だとこれは思うのですよね。

特にさっきの市民って話に戻りつつなんですけど、住民票における松本市民だけの話ではきっとないと思うし、自然相手のことだからこそあんまりその行政の区画とか、役場の中の縦割りとか、そっちに付き合っている場合じゃないと思うのですよ。

僕も関わっていた松本市の基本構想2030、あれも市民会議だったのですが、あの場で僕らが話したことっていうのも、市民の方が先行する事がいろんな案件で大切で、僕はあまり好きな言葉じゃないですけど「街作り」みたいな事だったりとか、僕の関心でいくと「空き家の利活用」みたいなものだったりとかっていうのも、結局行政からの依頼を受けてどう動こうかっていうスタンスでいるといろんなことが遅かったり、動こうとした時にはもう時間が過ぎ去っていて手遅れだったりということはいくらかもあるのですよね。

市民の側がまず動くこと、動いたことに対して行政側が「今のスキームだと対応できないじゃん。困ったぞ」ってなってもらっちゃって全然構わないと思っていて。「だから言ったやん、その縦割りだったら対応できんてゆーたやん。だからそこを横断しなさいよ」っていうのを市民の活動がリードして行かないと。むしろ行政はそっちのほうが動きやすいと思うのですよね。

行政職員の中にも、もちろんそういったことに課題を持っていて、なんとか動きたいと思っている行政職員が沢山いるはずで、その人たちに動いてもらうためにはこっちがリードする必要がある。その意味では、今からつくっていく

市民会議というところがどんどん縦割りと行政区画とか、そういったところを良い意味でブレイクスルーしながら、良い意味で無視しながら進んでいく必要があるのではないかなというのを感じました。

一方で、ある程度オフィシャルなものとして行政側からも認めてもらう必要があるってなった時に、あまりフランクになったり、カジュアル過ぎたりしない方が、フォーマルな装いはした方がいいのかなってところのバランスとしてはあって、となると意外と市民会議ぐらいのネーミングが程よいのかもしれないなというふうには思いました。

(香山)

市民とか会議とかそもそもそんなに堅苦しいものであっちゃいけないというのはありますよね。なんか松本市役所の中で会議やるっていても、そもそもそれだけでもなんとなく行きたくないなみたいなのあるじゃないですか？そうじゃなくて、松本市役所に行ったら楽しいよっていうそういう市役所だったらいいわけですよ。本来でいえばね。今度市役所の方も庁舎をどうするかって大きな問題ありますけれども。少なくとも、日曜日の市役所に誰も入っていきたいとは思わないけれども、日曜日にちょっと行ってみたいなっていう市役所の中で会議が開かれていれば、それは市民会議だっっていいじゃないですかね。

どんな市民会議だったら実際に参加したいっていうふうに手を挙げるか。市川さんどう思いましたか？

(市川)

先ほど市民にもいろんな関心度合いとかテーマに関してグラデーションを持っているっていうお話があったと思うのですが、やっぱり画一的なやり方だけではなくて、例えば場所とかテーマとか進め方に関してもいろんなやり方でやってみるっていうのはすごく良いかなと思いました。

ビジョンを考えるとという前提でいろんな先にもアイデア発散があって、それを収束していく意味でも、それが繰り返されるかもしれないんですけど。アイデア発散が必要ということなので、そういったところに面白さとかワクワク感とか参加したいなって思う。

人を動かすには仕事でデザインをやっているうえでもそうなのですが、どうワクワクしてもらうかっていうのがすごく大事なかなといつも思っています。なので、女鳥羽川の清掃のプロジェクトに商店街の人と参加したときに、1回川をきれいにしたうえでどう使おうか、っていうアイデアのワークショップみたいなものを実は去年やったことがあって、ただ12月の半ばぐらいにやったのでめちゃめちゃ寒くて、大学生の子たちと中心にやったのですが寒くて30

分られるかいられないかって事があったりして、でもそれはそれでそこで出会った子たちと色々繋がれたりとか、こういう意見を持っているのだなというのが知れたりだとか、すごく貴重な機会になったかなと思うし、そのエピソード自体もやっぱりあとで話すと面白がってくれる人もいっぱいいて、なのでそういうフランクなところも共有できる（皆さんが）マインドセットをもってらっしゃると参加しやすいし、やりたいっていう人もやりやすいと思いますし、なんか面白いことが生まれるのではないかなと思いました。

菊地さんの的にはもうちょっとオフィシャルな感じがあった方がいいかもってお話だったのですが、そういったものも勿論ありつつも、やり方のバリエーションが色々あってもいいかなと思いました。

（香山）

面白いことって言えばこの実行会議のメンバーの中で一番面白いこと、とんがったことをやるのは実はここにいる三木さんですね。のぼり作りとか色々やっていたと思いますが。

（三木）

今のお話聞いて前回の会議でもやっていたと思いますが、市民会議が「長期ビジョン」を作るための会議っていうふうになってしまうと、全く面白くないという感じになる。それでワクワクする人はいいのですが、市民会議が何かしているという中で長期ビジョンがでてくるということかなと。

ワクワクどうですかね？自分が義理とかがあって出席するものっていうのはいっぱいありますけれども、これは行こうって思うのは、目的がなくても行けるところっていう感じかなという。ここに行ったら何か面白いことが聞けるのではないとか、何か面白いアイデアが自分の中で沸くのではないか、っていうふうなところに人は来たいなと思うのではないかと思います。

ただ一方で、しなければいけないことっていうと、森林っていうのは育つのに時間がかかるわけですね。アカマツなんかは少なくとも60年前の人たちがこういうふうな森林の姿にしているわけですが、そうすると今若い人たちが2050年くらいになって社会の中心を担うようになった時に、2050年の人たちが「なんで松本市はこんなに森林があるんだ」「俺たち使いにくいじゃないか」「誰だこんな森林をよこしたのは」っていうふうに思われると、その時はまた面白くない。2050年あたりに社会の中心を担うような人たちが、今自分たちが森林の姿をいくら物申してですね、作っていったっていうふうになれば、2050年にこれは確かに自分たちが関与して造った森林の姿なのだ、っていうふうな事が実感出来れば、これから人々の生活と森林が近く

なるっていうふうな地域が作れるのではないかなとは思いますが。

だから会議の中にも2050年に、社会の中心を担っていくような人たち、そういう世代っていうのが入っていけばいいかなと思って、けどどうやったらいいのかっていうのはまだ私の中ではよく分かっていませんけども。そう思っています。

(香山)

2050年というのは30年ないので平均寿命的に言うと私はいない方になるのですが、恐らくそういうことではなくて、少なくとも三世代分くらいっていうのは今生きている人が考えていくことは可能で、責任があるなんて言い方をすると重たくなってしまいうけれども、でも現に今日だって子どもが生まれている訳じゃないですか。

今ここで生まれた子どもの事を考えないで生きていくっていうことはやっぱり変なので、それが人間世界もそうだけど森林っていうのはもうちょっと一世代っていうのは、波は大きいけれども今どんな森林ができていてことも現に見えている非常にわかりやすい形として、今マツの枯れた中に新しい森林が出来ているって見えているのだから、それをどうにかしようよって事は当然考えることで、それは今のことじゃなくて本当に将来の姿。

その将来の姿っていうのが今やっていること、明日やること、そういうことの積み重ねで決まっていくっていうことは事実で、私林業を何十数年やっている中で、昔から気がついてはいたのだけどやらなかったな、やるときや良かったなって、そんな事いっぱいあるわけですよ。それを取り戻すことができないものどできるものどがあるのですが、そういうことを丁寧の一つ一つ今から見っていく。もちろん森林が、マツが枯れて全滅してしまったわけではなくて、50年、60年の森林も松本中にいっぱいあるので、それをこれからどうしていくか。

当然そこにはでてくる木材っていうものもね、少なくとも植えた木に関しては、木材として利用しようと思って植えたわけですから、昔の人が。それ困ったなって思うよりは、これ使ったら楽しいよって思えるようにした方がいいのではないかなと。そういうような事も、この会議をやっていく中ですごく大事な要素かなと、そういうものは入った方がいいのではないかなとすごく思いましたね。

木材の利用っていうと渡辺さんがまた目の色変わるのですが、その辺どうですか？

(小山)

今ちょうど市川さんからでた、女鳥羽川行って寒かったけど楽しかったよ。

実は私、菊池さんのお話を一度聞いたことがあって、菊池さんに二度ばかり静かにお会いしておりまして、菊地さん多分知らないと思うのですが、私自身、街の教室に何度かお邪魔して、ここ行ったらワクワクするよねっていうのを三塾もやっていたのがあの街の教室なのです。きっと楽しい話が聞けるのではないか。ターゲットは多分私の世代ではなく、もっと若い方が多かったですけど、その若い方に混じって私も潜り込んでいて菊地さんの葉日に何度か行かしていただいたことがあるのですけどね。その中で森とか木のお話とか、そういう文脈って多分持てるのではないか。

要するに菊地さんが、空き家問題にフォーカスを当てながら松本っていうのを考えた時に、同じような問題が松本にもあるよと、だから菊地さんのお話は空き家問題と菊地さんで繋がってないのです。それ以前として、街の教室行ったら絶対わけのわからない面白い話が聞けるよねっていうところから行って、空き家問題であったり、そのあと街の教室行ったり、リビルディングセンターの補材の問題であったり、繋がっていくわけですよ。それでまた森に戻って。そういう文脈のところってすごくあったので、ああいう活動の中で逆に市民会議じゃないけれども、そういう繋がって聞く人の中で、例えば今の菊地さんがどう繋がってきたのかなっていう部分が少しあると、たぶん渡辺さんが木材の使った木をどうするって問題にとってもリンクするのかなと思うので菊地さんからの方からコメントほしいなど。

(菊地)

一回パスを受け取って渡辺さんにどういう良いパスを渡すかっていう宿題ですね。

街の教室を他の委員さんに少しフォローすると、僕の友人で長野市在住のデザイナーで瀧内貫さんという方がいらっしゃるのですが、彼が篠ノ井でまず始めた取り組みで、街のプレーヤーが今関心を持っている、あるいは課題に感じていることを、その街の人たちとみんなと一緒に考えるために、その考えを深めることが出来そうなゲストを招いてトークをやったり、ワークショップでみんなで作ったり、ちょっと街を歩いてみたりっていう手法は多様だったのですけれども、そういった活動体がかつてありました。それに小山さんがいらしてくださったってことですね。ありがとうございます。

さっきの市川さんが言ったフォーマルとカジュアルのバランスみたいな話でいうと、向く先に対して、伝える相手に対して、どの言葉が一番正確に届けたい思いが届くのかな？というところで、そこはまとう衣装を変えていけばいいというふうに思っています。

だから名前として、松本市森林再生市民会議っていうちょっとカチツとした名前が、松本市のホームページやポスターなどには載りますが、企画名には森の教室みたいなやわらかい言葉を添えていくとか。

市民に向けて言う時には、なんちゃらなんちゃらプロジェクトチームみたいな言葉で言いますが、それをやっている運営母体としては、松本市森林再生市民会議なんですみたいな言葉の組み合わせっていうところで、カジュアルとフォーマルを切り替えていくことが出来るのではないかなと思います。

行政に対して言う時には、松本市森林再生市民会議で話し合った結果、こういうことになりましたので、役場の皆さん一つよろしくお願ひしますっていう言い方。そういったところでいくと、母体としてはフォーマルな名前の方がやりやすさを伴いそうだなというふうに感じたのがまず一点です。

もう一つは、今の香山さんの話にも引き継ぎつつもう一個話しを加えると、さっき松本平っていう言葉がでていて、僕も自然地形で物事を捉えることに、最近は関心があるのですが、松本でいう盆地や平で住んでいる以上、誰しもが森とか里山とか森林とか林とか言葉は多様なのですが、いわゆる緑と何かしらの接点は必ず持たざるを得ないと思うのですよ。

風景として否が応でも目に入ってくるということもあるだろうし、僕のように日々の感動として楽しむっていう、より積極的なスタンスの人もあるだろうし、市川さんのようにアクティビティのフィールドとしての緑、自然があるって方もいるだろうし、さらに林業関係者は、もはや職場であるっていうこともある。

関わり方が多様であったり、関わり方の度合いにもグラデーションがあったりするのだけれども、関わりが0（ゼロ）って事は有り得ないと思うのですよ。この平に住んでしまった以上、多様な関わり方のポイント、ポイントに対してアプローチができる。あるいはそれぞれのポイント、ポイントから最初に渡辺さんが話したように、この話誰に言ったらいいのだろうっていうモヤモヤを、とにかく市民会議に行ってみれば、誰かがレスポンスをしてくれる、打ち返してくれるっていう団体であることが、望ましいのではないかなというふうに思いました。

もちろん皆さんそれぞれの関わり方で関心軸も違うし、関心度合いも違うわけだから、市川さんがさっきおっしゃっていたように、この平に住む皆さん一人一人にとって、「あなたと森の関わりはこういうことです」、「私と森の関わりってこういうことです」という気付きや学びを、それこそ街の教室的になりますけど、提案、提供することが出来るような、言わば専門家チームとしての市民会議ってものがあるのは、とてもこの街に暮らしている価値とか意味っていうものを、市民と森林という一般化しすぎていて、私は市民なのかな？と

か森林ってどれだ？となるのですが、私とあの森とか、あなたとあの公園のあの林の木々とかいう話になってくると、「私のこと」になるのですよね。

いかに皆さんが考えている森林とか、森、林、里山、あるいは公園だったりするかもしれない、街路樹だったりするかもしれない、植え込みだったりするかもしれないってものと、私を、あなたをどう繋いでいけるのかっていうその話だと思えます。

渡辺さんへのパスになったか分かりませんがお願いします。

(渡辺)

さっき言っていた木材の活用っていう部分だと二つあって、一つはこの「体験型」。もう一つは「物」だと、今いろいろお話聞きながら考えていて、一つは体験っていうのが先ほど菊地さんのお話でもあったように、自分で経験をやる場所。

例えば、松本だと相談窓口が分からないとかあったと思うのですが、危ない木を伐採してほしい時に、どこに問い合わせをしたらいいのか分からないっていうこと。あとは、その相談って意味ではないですけど、目の前の木を伐採しているところってお二方は見たことがありますか。あんまりないですよね。だから、そういった普段経験できないようなことを経験できるのって、その人にとってもすごく価値のあるものですし、逆にその価値を自分が感じたことによって「伐採を見られるところがあってね・・・」みたいな感じで、人に伝えるヒントにもなると思うのですよね。

あともう一つの物っていう部分については、木材って色々利用価値があると思うのですが、先ほど言っていたクラフトフェアっていう大きなイベント事を通じて、木に触れる機会が増えたりとか、松本市内の飲食店の中で経木っていう薄い木でおにぎりを包んだり、お肉を包んだりするものがお皿の上で利用されているのですが、そういったところで「松本にもこういうのがあって飲食店で出されているんだよ」とか、木材の活用として、様々な切り口があると思うんですよね。

あとは、お正月の鏡餅って皆さんお餅で作られていますか？

私は、あるきっかけで木の鏡餅があるのを知って、すごく欲しいなって、家に飾りたいな、すごく素敵だなって思って中町を歩いていたら売っているところが実際にあったんですよ。

松本で手に入るのってすごくびっくりして、そういうのってやっぱり知らない人が多いですし、知っていたら私も欲しいという人もいるかもしれないじゃないですか。

木ってそういう切り口もあるってことやすごくいろんなアイデアもあったりするんで、そういうのはもっと増えてほしいですね。

あとは、市民会議の中で情報交換じゃないですけど、「こういうのがあったんだよ」という場になればいいなって思いますね。

(香山)

本当に木とか森林も繋がって考えた方が良くて、今、木材が特に森林と離れてしまっている。山の木から出来ているって思えないですよ。

ホームセンターに売っている材の姿を見るとたまたま、ウッドショックなんということが起こって、外国の木ではなくて地元の木を使うっていう流れがはっきり見えてきたところですけども、実際にこの地域の中で、山の木を木材にするっていう仕事をやっているけれども非常に力が弱くなってしまっていて、そこを盛り上げていくために、それは製材所が頑張ればいって話では無理なんですよ。

でも市民が関心を持って「そういうもの欲しい」とって製材所に行けば、それは製材所が「ああ、そうか」とってことになる。

そういう繋がりだと思うんで、そういう意味でも森林のことをきっかけにして市民が森林に関心を持つ、さらに木材に関心を持つっていう動きが起こっていく、そのための活動をする場所としての市民会議みたいな。だいぶそういう感じが今の話で出てきたと思う。

これは正式にいつ発足しなきゃいけないって、どこにも書いてないんですけど、いくらなんでも来年度だよなって、周りでは思っているんじゃないかと思うので、それを具体的に行政の中の会議という名前がつくものとしてどういうふうにデザインしていけばいいのか。

なかなか時間もない中で難しい部分もあると思うんですけど、でも来年もう1回この実行会議みたいなことやってたんじゃ、なにやってんだよって話になるので、もうとにかく来年度は動き出す。その動き出し方っていうところをなるべく今回の提案書の中に言葉として入れていかなければいけない、それが我々の任務で今日いろんなアイデアが出てきましたので、そこを引き継ぎながらどんなふうにリクエストを作っていくのかなってところだと思います。

あと一ヶ月ないんで結構大変なんですけど、市民会議ってものを軸に市民会議の組み立て方を今回の文書の中に入れていければ、かなり面白い報告になるのかなという気がしているところです。

最終的に多分今回の事情で言うと、文書っていう形の報告にしかならないのかなっていう気はしますが、それにしてもちょっと課題として残りの時間の中で是非今日話しておきたいなっていうのが、じゃあこの実行会議が作る提案書的なものをどんなふうにして作って、どんなふうにして市民に広げていけばいいのか、その方法をちょっとここで話をしておいたほうが、多分事務局の人もそれなりに心の準備ができるんじゃないかという気もするんですけど、そうは言っても時間もない、お金もないという中ではあるんですけど、何か工夫をしたいなと思います。

今期でいえばこの実行会議自体が行政のやっているこういう会議としては珍しく、1回目だけは中継しなかったんですけど、2回目以降はYouTubeで中継して、さらに市役所の方で設定したのとは別にこの4人で、Facebook

o o kのページを作って勝手に情報を出すとか、あまり他ではやってないスタイルをやってはいるんですが全然力不足で。

例えばアクセス数のことを言えば、今日この瞬間に何人の方が視聴されているか知りませんが、とても届いているとは言えないだろうし、アーカイブを見る人だってそんなにいるわけでもない。

ちょっと数字は忘れましたが、去年の専門家の提言書自体も松本市のホームページから見ることはできるんですが、見に来ている人はそんなに居ないんだろうなということも分かっています。

そういう点で具体的にこの活動をどうやって広めていくのか、市民会議って形になった時には広がるんだろうけど、今期の報告書をどのような形を出していったらいいのかってことを我々の中で話をして、それをまたゲストの方にも意見伺いたいのですが。どんなスタイルがいいですかね。

例えばこの会議をグラレコにすれば、なんていう提案をしていただいた渡辺さん。結局グラレコは実現してないんですけど。

(渡辺)

出来たら会議自体を、リアルタイムでグラフィックレコーディングで文章とかではなく、イラストを用いて市民の方に届けられるような場所が出来ればと思っていたんですが、今回の会議をどうまとめるかについては、ちょっと難しいんですけど文章でまとめる場合、今、土台を皆さんで作った中で、それをよりブラッシュアップして、例えば会議の2時間を全部一字一句拾っているのって皆さんが読みづらいと思うので、皆さんが読んでいただけるような文章やテキストがいいなと思います。今、正直なところ良い案が思い浮かばないです。

(香山)

なかなか大変なんですよ。最低限文書を作らないといけない。

これは言ってみれば行政的なルールだと思いますが、そこをどういうふうに工夫していったらいいのか。

我々の中には、文書書きの専門家はいないんですけど、でもかなり文書書きの仕事に近いことにしておられる三木さん。

(三木)

これは結構難しく、市の仕事としてはちゃんとした文書で報告書をまとめる。これはお約束ですから、しなきゃいけないんです。

例えば、それをダイジェストにして広報するっていうのは、いろいろなビジョンとか計画でやっていますよね。計画本文とダイジェストみたいな。

だけどダイジェストの方は読んでそんなに面白くないというか。

なかなか一般の市民の方々がそれを読んで、何これ楽しそうと思うようにはなかなかならない。それをどうしていくか結構難しいですよ。

もちろんどんな形でも、ダイジェストは作らないといけないと思いますし、少なくとも市民が容易にアクセスできる市のホームページですとか、そういう

ふうなところに置いてくということは、絶対にやらなければいけないですね。

それとプラスαなんか上手い方法が、なかなかまだ思いつかないですね。

1つは、ダイジェストを作っても、「ダイジェスト作りました、それはホームページに載っています」ではなくて、そのダイジェストあるいは、その報告書を持って、これから市民会議に関わってもらいたい人のところに我々なのか分かりませんが行って、「こんなのが出来ただけど、これ絶対に面白そうですから4月からやりましょう」というふうに、やっぱりそれでやっていくしかないんじゃないですかね。

営業というか、そういうことはやった方がいいですね。今のところそれぐらいです。

(小山)

今の話の中で、すごく大事なものは、報告書と市民会議の招待状って言い方をしているか分からないですけど、それって少し毛色が違うのかなって。

報告書は報告書でこういうことやってかなきゃいけないよねっていうのは、かつちりしたものがいいのかなと思う。

一方で、今日はすごく良いキーワードになっていたのが、私とあの森っていうふう菊地さんが言われたキーワードってすごく大事で、「自分事として森を捉えましょうよ。その一員にあなたはなりませんか」というお誘い文章と、この報告書っていうのがどう繋がるかだけ。

そうするとダイジェスト版ではなくて、もしかしたらそれがあって次のエントリーシートみたいになっていう発想の方が、もしかしたらいいのかもしれない。

報告書があってダイジェストがあって、でもここからやりたいのはこういうことなんだ。

それがどうしたら僕らとしても作りながらワクワク出来るかが勝負じゃないですか。出来たものを1回今回ゲストで来ていただいている2人に見ていただいて、つまらないと言われなければそれで進んでいくんじゃないかと。

そういう意味では、報告書は報告書として作っていくし、ダイジェスト版はダイジェスト版として作っていくんだけど、来年から動いていこうとするものに関して菊地さんや市川さんも松本市のそういう会議にご参画いただいている方で、そういうところに参画されているんな意見を言われた方として、これは面白そうだから参画していたメンバーに伝えてもいいよっていうふうには、お考えになるかどうかは僕は1つのターゲットだと思う。

それがもしかしたら今年度の報告書には、間に合わない可能性が多分高いと思う。

次年度のキックオフは、どういうふうにしたら皆さんに声を掛けられるのかを少し私たちの残業みたいなものになるんですけど、その形で隙間のところでちょっとご足労いただいて「ちょっと見てよ」と、それが出来たらいい。

そして、市民会議はどんな人に来てほしいかも含めて、「こういうのだったら、僕の知り合いだとこういう人がいるからこういう人には声かけられるよ

ね。それから同じ時にやられていた仲間の方で、こういうこと書くとあの人来そうだね」っていうイメージの方がいらっしゃるような気がします。

そういうことが出来るのであれば少しワクワク感が出る。

こういうワクワク感を生み出すんだったらこういうのが出来るよっていう雑談が出来ると、もしかしたらキックオフになるかもしれない。この辺かなという気がしました。

(香山)

ちょっと1年前に戻りますけど、専門家の検討会議の提言書を作ったときに、とにかくレベルの高い専門家の人たちが集まって、大変な文書がそれぞれから寄せられて、それを一言も無視せず1個にまとめるという作業をちょうど1年前くらいにやったんですね。

事務局の方と頭突き合わせながらやったんですが、結果としてもものすごい分量のテキストの提言書ができて、これは業界の専門家からは非常に評価が良かったです。よくこれだけのものを作ったと言われたんですが、さすがに難しくて解説がないと読めないんですね。

これを使って勉強会をやるのはどうって実は私、渡辺さんに提案したことがある。でも全然うけなかったんですね。結局これで勉強会やろうってそもそもそういう発想にもならないことだったっていう。それが私の反省でして、あの時渡辺さんに委員になってくださいってお願いするよりちょっと前だった気がするんですね。

全然うけないんだなと思った。

確かに専門家にとってはうける内容だったとしても、その提言は市長さんへの提言、あるいは市の専門家の方への提言であって、市民への提言になってなかった。

もちろんあの時の提言書はそういう意味が必要だったんですけど、でも今回実行会議でやりたいことは、市民の皆さんにどうやって一緒になって動いてもらえるかっていう話で、そういう意味で去年のような提言、あとで誰か解説がないと読めないもの、あるいは難しい本でも誰かちょっと説明しながら一緒に勉強会やりたいよって思えるような本なら、それはそれでいいじゃないですか。そういうふうに前はやらなかった、出来なかったけど今回はなんかきっかけに出来るようにしたいなと改めて思っています。

それで渡辺さんに聞いてしまうんですけど、やっぱりあの提言書使った勉強会なんかやってもしょうがないって感じしました？

(渡辺)

やってもしょうがないって意味ではなかったんですけど、その中身がこっぴどどういう意味なんだろうっていうことであれば、専門家の方にお尋ねしたい部分はもちろんあります。

あとは私あまり擦り合わせというか、イメージの合わせができてなかったのが大変申し訳なかったんですけど、提言書を開いてみんなで読み合わせをして勉強会っていうイメージが湧きづらかったです。

勉強会のための勉強会がどういうものをイメージしていたのかなというところが難しかったです。

(香山)

つまり大学のゼミみたいな。

大学のゼミだって、もちろん三木先生の授業は面白いのかもしれないのですが、勉強ってこと自体がテキストを解説するみたいな勉強ではないので、恐らくそういうことでないと次の市民会議っていうイメージに繋がっていかないのかなと思う。

今日いよいよ、あと30分しかない中で、これから作業として我々が事務局の皆さんも含めて、実質上は、2週間ぐらいで書き上げなきゃいけない。

だからそこでは、小山さんがおっしゃるように間に合わないので、延長線が出てくると思うんですけど、せつかくこれだけの時間を掛けてやってきたものを発信するにあたって、こんなアイデアがあったらいいんじゃないかっていうそんな感じで、本当に出来そうもないことでも何でもいいんですけど、ちょっと教えていただけたらなと思うんですけど。市川さんどうですか？

(市川)

切り口って、別に勉強しようっていう投げかけだけじゃなくてもいいかなと思いました。

でも来年度の市民会議をやるにあたっての個人的な理想というか、こうだったらいいなっていうものが2つあって、1個が先ほど言った、関わってくれる人ってこれから決まったり、お声掛けしていくと思うんですけど、その時にゴールありきではなくて、何か自分と関わってくれた人たちが、内容とかやり方とか柔軟にいかないものでもOKだよっていうスタンスだとすごく参加しやすかったりとか、面白いものが生まれてきそうだなというふうに思いました。

自分もそうなんですけど、知ることによってどんどん自分の認識とかが変わっていくので、そうするとさっきの市民のグラデーションの話もそうなんですけど、市民の方たち自体もそれぞれ関わり方があるけども、知ることとか、関わることによって、どんどん彼らも変わっていくっていうのも許容したような組織体だとすごく有り難いなと思いました。

あとお声掛けする時も、ビジネスでいうとスカウトしたり、「一緒にこれやりませんか」という時、プレゼンする時とかって、文書だけの資料を持っていきますが、プレゼン資料的な分かりやすいものを持っていったりするんで、先ほどおっしゃったような、文書的なものだけじゃなくて、一緒にやりたいなと思ってもらえるような市民向けのものがある、発信物があるといいかなって私も思いました。

最後に1個理想でこうだったらいいなって思うのが、開催する場所をいつも市役所じゃなくて、木と関われる場所みたいな。薪ストーブ1個あるだけで本当に場が和んだり、木って良いなって頭だけじゃなくて、体感できる中で話し合うことで、生まれてくるものが違ってきたら、いいんじゃないかなというふうに思いました。

それにより松本市内で薪ストーブを使う人がいっぱい増えたり、もしかしたら松枯れで切った木とかも使う人が増えて、解決しちゃったなんてことが出来たら面白いかなと思ったので、開催する場所も工夫していただけると嬉しいかなと思います。

(香山)

ありがとうございます。

さらに今の発想でも何でもいいので、てんこ盛りで菊地さんお願いします。

(菊地)

実際に2週間で書きあげる座長の気持ちを思えば、こっちからてんこ盛りのアイデアをお話しする勇気は僕にはないんですが、皆さんおっしゃった通りこの報告書は、報告書として完結させつつ、来年度以降の活動を具体的なアクションに繋げるための資料として、別枠で考えていくことの方が、現実的だと思いますし、効果的だと僕も思います。まず賛同をします。

なぜかという、先ほどの香山さんがおっしゃった、どちらかというとその専門性が強すぎる文章が、一般に裾野が広がっていかなかったところの課題意識があるという認識でいらっしゃると思うんですけど、こういった話を進めていく時って、専門性がある皆さんが絶対に必要じゃないですか。

専門知識も出して、その専門知識を携えてらっしゃる方も必要です。

もちろんその専門性と市民との間を架け橋してくれる翻訳家的な存在も併せて必要です。このあたりは、渡辺さんとかが強みだと思います。

且つ、先ほど植物の生態系にとって、行政区画は関係ないと話をしたんですが、一方で、行政各課には、ご一緒いただかないといけないところもあると思います。

うまい関係性の中で一緒に進めた方が、物事が進めたい方向に向かってきますよね。

なので、この報告書は、むしろ事務局の皆さんによく聞いていただきたいんですけど、事務局の皆さんがこういう報告書を書かれたら、もうこれは来年度以降も伴走せざるを得ないなって思ってくれて、いや頑張って一緒にやってみましょうって言うてくれるような言葉が並ぶのが理想だと思います。

それは書く方がきっと出来ると思うんです。僕は今回の最終回しか参加していませんが、その手前に皆さんが重ねてきた議論があるはずなので、そこをそういう文書としてまとめていくっていうことで、まず着地をすればいいんじゃないのかなと思います。

偉そうに上から言っていますけど、あくまでも私見です。私はそう思います。あとは、三木さんがおっしゃったように、一人一人に尋ねて話すっていうことですが、コロナの状況で許さないのであれば、オンラインも含めて、それが大切になってくるのではないかなと思います。

僕なんか、この前の秋の衆院選の時に投票率が低いということの課題に対して、これはどうやったら投票率が上がるんだろうっていうふうに散々悩んだんですよ。トークイベントを友人と信毎メディアガーデンのスタジオを借りてや

ってみたり、いろいろやってみたんですが、結局今のところ出てる結論としては、投票に行くという行動の意味や意義、価値に気づいている人が、それを気付いていない隣の人に教えてあげるっていう、一対一の関係性の連鎖を繋げていくってことしかできないなということに気付いたんです。

それは、僕が投票に行くのはこういう理由だよ。なぜならこういうところに価値を感じるからっていうのを共感してくれる相手は、その人の周りにしかないんです。

そこに気付いている人と気付いていない人の間を行き来できる人は、一対一の関係性の中でしかなくて、だからまず皆さんから一周り外の僕とか市川さんなのかもしれない。

先ほど小山さんが言った通り、僕がそれを見て「いや、これは基本構想2030を考えたみんなにぜひ一緒に参加してもらいたいから、それぞれの専門的な視点から僕から皆さんにこれ共有します」みたいに思えたら、その先に繋がってくじゃないですか。そういうことを繰り返していくっていうことが必要だと思います。

また、「私とあの森の関係性」って言ったと思うんですけど、繰り返しになるんですが、松本平に住んでしまった以上、誰もが関係性は持っているはずなんですよね。

0（ゼロ）じゃなくて、0. いくつずつであっても。

多分、この市民会議の委員は、松本平に住んでいる一人一人が委員だと思います。ただ委員の自覚があるかないか。

先程の気付いている、気付いていないか。だから参加しませんかというところより、委員になっている事を知っていますか。気付いたら君も委員なんです。そういう誘い方なのではないかと思います。否応なく気付かされてしまった関係性は、否応なくは言い方がきつ過ぎるかも知れませんが、多分この地域に住むことによって、例えば町内会や会は組織になってしまうので、住んでいる場所の周辺の地域や、もう少しプライベートの話で言うと、例えば夫婦や家族は誰しも関係性です。関係を持ってしまった以上は良好である方が日々の暮らしは楽しいですよ。どんな関係性も。

だから、森との関係性も持ってしまっている以上は、その人にとってのその森との関係性が良好であった方が日々の暮らしが楽しいはずなのです。僕であったら、僕と毎日眺める北アルプスの風景という私と北アルプス風景の関係性が毎朝通勤する時に、「ああ今日も山がきれいだな。」と思えると、この良好な関係性が、一人一人が松本平に住んでいる皆さんの中にあるといいと思います。それをどう気付いてもらえるのか。

あなたは、この森と実はこういう関係性があったのですよ。それは今こうだとちょっと困りませんか。困ったとしたら、こうすれば解決出来る気がするのですが一緒にやりませんか。

これは、その人と、その森の関係性に実はその人も知らないところに課題が

潜んでいた場合、それはその市民会議の中心のメンバーの皆さんが伝えていく。すでに良い関係性の場合もあると思うので、その良い関係性をより育ていく為には、この森とあなたがこのような関わりを深めていくと「あがたの森の森は生き生きすると思うのです」という話をしていくということなのかと思います。

何にせよ来年度からスタートするアクションの多様性や多彩さ、多分、数も必要となってくると思います。いろいろなグラデーションに対応していくということになると思います。

その思考として、頭を使う方としては、そちらにどんどん移行していったら、今回の報告書は二週間後に、繰り返しになりますが事務局の皆さんが「来年度以降も協力します」と言ってくれる文言を並べるとのことだと思っています。

(香山)

この残りの中で報告としてまとめていく上で、作業が急にホットになったのは約一日くらい前でしょうか。

いよいよ締め切りが近いので、年度末、皆さんお忙しい中ではあると思いますが、ちょっとテンションをあげてやっていくと面白いと思います。

実際の作業としては、私と事務局の皆さんとやっていくのですが、せっかくここにいるので共有しておきたいと思います。まだここにあるドラフトに載りきれていない表現の仕方とか、ここを強調していきたいとか、使い方の問題とか、そのあたりはランダムでいいので、少し最後に出しておいて頂ければとオフィシャルな会議の最終会としてはいいのではないかと思います。

(小山)

これからやっていく市民会議は、こうあるべきだというところを、ゴールの共有さえ分かれば課題があり、前回の報告書があるように、次の回はこうするということがあれば、その辺のルートマップはそんなに難しくはない。

なんとなくのイメージなのですが、市民会議って何をやっているところなのか。松本市の森を自分事にしていく為に、あなたと森の関わり学びをやるような田作りなのではないのか。

大きなターゲットがあれば、いいのではないかと思います。

そこには長期ビジョンを作る会議は嫌だというご意見がありました。長期ビジョンは後から出てくるものでいいのではないのかと思います。

前回の会議でもあったように、学ぶところのベースが出来なければ話が出来ない。森は今どうなっているのか、学びがない中でイメージだけがゴワゴワして好き勝手なことと言って理屈に合わない。いろいろなことを言って、「私は勉

強していないので分かりません」と言う方と、「分かり過ぎているからこうなのだ」とのギャップバランスがあって欲しくない。

そうすると、学びながらいろいろなことを考えて行きましょう。

このようなことが出来たらいいと、渡辺さんが持って来た情報ですが、実際に木を伐る現場を見に行く体験学習のような。それこそ、身近な森に行ってみよう。そのアイテムは幾つかあるのです。「私とあの森」を繋ぐためにいろいろな仕掛けをしていく。それで、自分事になっていけば、この森をこのようにしていけばと考えると、未来のビジョンがボワボワ出てくるのではないか。最終的にそこに行き着くために、私たちは動いていくのだと思います。

もうひとつ、菊池さんが最後に出していただいたことでハッとしたことは、松本平に関わってしまった人全員が会議のメンバーだと、あの発想はすごいです。そこをうまく出せたらいいと思う。

松本平でみれば、木には関心がないと言っていたが、現実には森林に多くの市民が行き来している。だけれども、森の中に入れなからどのように入っていかうかと前回は議論していました。それを僕らがネガティブに考えていたが、今日の菊池さんの発想はそうではないのだと感じた。

背景として考えている以上、もうあなたは関わっているのではないのか。そのような発想だとすると、もう少しポジティブにいけるのではないかと思う。

森の中に入らないネガティブ課題とその間を繋げばいいのではないのか。そのようなスタンスで市民会議を考えていくと、前の問題は全部クリアになっていくのではないのでしょうか。

(香山)

その辺のトーンがすごく大事です。

ここで挙げている課題の部分では「専門家がない」とか、「市民の関心がない」とか、その意識で今回の会議でなんとなく突き放したというのか、そのような感じになってしまっています。

一緒の課題だという、そのような感じが現れるような表現の仕方がすごく重要です。

実際問題、今回の報告書自体をどのくらいの方に読んでいただけるのか分からないのですが、いざ見た時にそのように書いてあるのと、なんとなくやっぱ難しいことが書いてあるのとでは全然印象が違います。それはすごく大事なことです。その文書の端々に、温かく全体を包んでくれるような表現を入れて作るといいのではないかと感じました。

前回は専門家のきちんとした意見を書かなくてはいけないと、強い姿勢で書いてあったので、今回の報告書は、そこに気を付けなければいけないと思って

います。

(小山)

そういう意味では、菊池さんが言っていた専門家がいて、森が存在すること、そしてそれを繋ぐ翻訳家がいること。

三つの中で翻訳と専門家が最初に繋がればいい。この会議も翻訳家と繋がればいい。そうすると、本編と繋がってきた翻訳家は文章を通して市民と繋がっていく形になる。それが市民会議ではないのでしょうか。

そのような雰囲気の中で共有していけば、長期ビジョンをつかむということも考慮する会議ではなく、皆がアクションしていく会議であることを強調していくこと。市民と森の距離をどんどん近づけていくことは、ずっと変わっていないと思います。そこにフォーカスをあてる。

近づきすぎてビジョンも出来て、これで市民全員が分かってしまったらこの会議はいらない。そこまでなれる様にひたすら頑張るのです。そのような話になるのかと思います。

(香山)

結局のところ三木さんにいろいろ投げながら文章を書くわけですが。

(三木)

報告書として考えると、報告書の中で松本市がすでに持っている計画あるいは今実行しようとしている、立てている他の計画と森林再生というのは、こういう繋がりであると、この実行会議が考えを示すやり方も一つあるのかと思います。

例えば松本市は2050年ゼロカーボンシティを目指している。

2050年ゼロカーボンシティを作るという時に森林がまったく関係ないということもないし、その時は恐らく森林資源を活用する松本市になっている。

そうすると、森林再生というところもそれに関わって議論をしていくことが必要になる。それは結構楽しいことなのではないでしょうか。

森林にはあまり関心がないかもしれないが、ゼロカーボン社会を作りたいという人もいるわけで、ゼロカーボン社会を作りたいという人に目掛けて、そのために松本市の森林をどんなふうにしたいですかと進めていくことでワクワクしていけるかなと思います。

その視点にある人と行政の計画、森林再生がどう関わるのか。ここで言うロードマップのあたりでしょうか。ここの辺りで繋いで、たぶん松本市役所の

辺りはそのような横を繋ぐということは無いかもしれない。

実行会議の我々として、これとこれは関係があると考えて書いていくと面白いのではないのでしょうか。

(小山)

基本構想の中でその辺の文脈を読み取ろうとして、あれとあれを僕らなりに繋がっているというか、繋げていくという作業になります。

(香山)

特に、森林政策そのもので言うと、今回のドラフト中の第3、4、5章と実際に動いている部分なので繋がりを書かなくてはいけない。

前回の専門家の提言の中で、飛ばしている課題で、環境政策の中での森林リカバリー、ここの中にも単語は出ているのです。

実を言うと、去年は議論出来なかった内容だったので、飛ばしてしまったのですが、森林に関係なく生活の全部に関係してくる。要するに緑のインフラと言うのか、生活基盤という意味での森林なので、あまりスルーしてはいけません。だから広げて考えていく必要があるのではないかと改めて思います。

渡辺さんには、たたき台をたくさん書いて「こんな感じになったんですが、読んでみてどうですか」と言い続ける、そういう関係かと思うのですが。今日の会議の段階で何かありますか。

(渡辺)

先程、皆さんのお話でもあったとおり、報告書は報告書できちんとした物があり、別に次の市民会議に繋がるようなパワーポイントでまとめるのか、ポスター掲示などで皆にシェアしやすいようなツールを使うのか、そのような事を模索しながら次に繋げていけたらと思います。

(香山)

どうも延長戦があるようです。延長戦は予算もない。でもとりあえずやる人は、ここにいる4人は申し訳ないのですが、そして今日から2人参加していただいたので、若干延長戦では関わっていただけますか。よろしいでしょうか。こうしなさいと、いう事ではなく、黙ってられないような事を書きますので頻繁に情報を出していきたいと思います。

お忙しい中をありがとうございました

時間どおりに終わらせなくてはならないと思っています。あと5分程で一言ずつ、菊地さんから今日の感想をお願いします。

(菊地)

僕自身は中山に暮らしながら松本の市街地に通って毎日仕事は市街地でやって中山に帰っていくという暮らしをしていて、街と自然の距離感の良さというものを日々実感しながら生活していて、この街に暮らすことのひとつの魅力だと思っています。

それが僕と森との関係性に気付いている状態ですが、多くの松本平に暮らす人たちにとって、それぞれの自然との関係性や心地よさを感じながら、この地域で暮らしていくことができる、地域全体の幸福度に当てはまるか分かりませんが、地域全体が柔らかく、優しい雰囲気を作られていくのではないかと思います。

その時は松本平に暮らす以上、森や緑の地域資源は非常に重要で大きな役割を持っているので、その人たちをどのように繋げるのかという話は僕も勿論関心があるので引き続き皆さんの議論を拝聴しつつ、参加出来るところは参加していきたいと思っています。

(市川)

一個人だけで山のことをいろいろ考えてもなかなか答えが出ない場面が多いと思っていました。今日、皆さんと2時間お話するだけでも自分の中で身近な山や、どのようにしたらより良くなるのかに対する理解度が少し上がってきたと思うので、是非今後もこのような実感が持てるような会議がどんどん出来ていくと面白くなっていくのではないかと思います。

(香山)

ありがとうございました。

森林再生実行会議の第5回が終了となります。

会議としては終わりますが、集まった会議ではない形で実行会議自体も部屋で集まって話をするよう事ではない。

市民会議の前哨戦としてはっきり見えています。報告書作りだけでなく、延長戦の部分含めて、いろいろな形で事務局の方の協力も得ながら進めていきたいと思っています。

具体的なスケジュールは、市長さんに報告を出す日は決まっていますが、どのように調整をしながらやっていくのか。このような形での発信は恐らく最後となり、次は報告書という形で発信することになると思います。いろいろな形で今日実際にお会い出来た菊池さんと市川さんには、また関わっていただきつつ、いろいろな人たちのサポートを得ながら取りまとめていく作業が出来れば

と思います。

一年間ご苦労様でした。最後に事務局にお返しします。

(総合戦略室長)

ゲストのお二方、どうもありがとうございました。

改めまして委員の皆様には御礼申し上げます。ありがとうございました。

本日で、全員が集まって行う会議は一旦締めくくることになりますが、先程小山さんからありましたが、市長への提案書を出すということがございますので、引き続きよろしくお願ひします。

市としましても次年度に具体的なアクションを起こして行かなくてははいけないと思っています。

その中で市民会議というお話がございました。

市としまして林業に携わる方、市民の方々、そのような方々を繋げる役割、責務があると思っております。今後も皆様にはお付き合いいただけたらと思います。

改めまして菊地さん、市川さん、本日はありがとうございました。他の市民会議でもお世話になり、本日はこのような形で再度、関わっていただきましたので、今回もよろしくお願ひします。

本日はありがとうございました。

(森林環境課長)

以上をもちまして第5回森林再生実行会議を終了いたします。